

SY6-1

安全な食物経口負荷試験のかんどころ

山田 慎吾

国立病院機構三重病院 アレルギー科

食物アレルギーは、症状誘発の病歴、スキンプリックテスト、抗原特異的IgEなどを参考に、必要に応じて食物経口負荷試験(OFC)を行うことで診断される。管理の基本はこのような正しい診断にもとづいた「必要最小限の原因アレルゲン除去」であるが、診断が必ずしも容易でないことから、臨床現場では、保護者のアレルゲンの摂取への恐怖心による除去がそのまま容認されたり、抗原特異的IgEの上昇のみを根拠として除去が指示されたり、など不要な除去に陥る例が少なくない。なぜ「不要な除去」は良くないのか？ 厳しい除去食はこどもたちに余計な負担を強いて栄養バランスを崩すリスクがあるだけでなく、最近の研究では、少量の原因アレルゲン摂取で食物アレルギーの寛解を早期に誘導できることが明らかにされており、不要な除去はかえって耐性獲得を妨げることにもつながりかねないからである。それでは、必要最小限の除去をどのように指示したらいいのだろうか？ ここで大切なのはOFCをうまく行うことである。つまり、OFCを単なる診断のため(疑わしい食物で症状が誘発されるかどうかをみる)だけに行うのではなく、「安全に摂取可能な量を知る」(必ずしも症状を誘発させない、あるいは誘発してもなるべく軽症にすませる)ことを目的として行う。OFCで安全を担保して、「食べさせていくこと」は、早期の耐性獲得につながる「新しい」食物アレルギー管理法である。本発表では、安全なOFC実施のコツを述べたい。2020年に食物アレルギー研究会から「食物経口負荷試験の手引き2020」が出され、安全なOFCを行うための準備、リスク評価、施設の選択、総負荷量、摂取間隔、分割方法、症状出現時の対応などがわかりやすく説明されているので、ぜひご参照いただきたいが、シンポジウムではそのエッセンスを、当施設での経験も踏まえて紹介する。